

2019/09/12 第71回日本教育社会学会 at 大正大学

誰がいじめ，誰がいじめられるのか

眞田 英毅 (teruki.sanada.s8@dc.tohoku.ac.jp)

東北大学大学院 文学研究科 総合人間学専攻
行動科学専攻分野 博士課程1年

研究の意義と背景

- いじめは1970年代以降，社会問題化
- いまなお，いじめにおける事件が発生

広島・中3女子生徒が転落死 複数からいじめ、暴力

第三者委調査

広島市佐伯区の市立五日市観音中3年の女子生徒が昨年7月に死亡し、後にいじめを受けていたことが分かった。有識者でつくる第三者委員会は5日、複数の同級生から死ねと言われ、傘でたたかれる暴力も受けていたとの調査結果を発表した。今後、いじめと死亡の因果関係を調べる。

第三者委や学校によると、学校は女子生徒の親からいじめの相談を何度も受けていた。だが市教育委員会に一度も報告せず、本来設けられるはずのいじめ対策会議は開かれなかった。

女子生徒は、1年時に数人から「きもい」と悪口を言われていたのが、3年になると十数人から悪口について悪口や「死ね」などの暴言を吐かれるようになった。いじめが広がっていった。2年時に消しゴム片を投げられたり、3年時には傘で体を1回たたかれたりする暴力もあった。いじめは小学校の低学年から続いていたという。

市教委によると、女子生徒の死亡直後に教員への聞き取りで、悪口など7件を確認。いじめを苦に自殺した可能性があり、いじめ防止対策推進法が規定する「重大事態」に当たるとして、第三者委に調査を委託。生徒らへのアンケートや聞き取りをしていた。

調査結果を受け、記者会見した太下茂校長は「いじめに対する認識が甘かった」と謝罪。市教委の山崎哲男生徒指導課長は「いじめを防ぐことができずに申し訳ない」と頭を下げた。

第三者委は今後、学校の対応の是非についても調べる。

女子生徒は昨年7月24日朝、校舎近くの駐車場で転落死しているのが見つかった。女子生徒の部屋には、遺書のような手紙が残されていた。遺族は、弁護士を通じて「いじめについて何度も学校に伝えたのに、どうして止められなかったのだろうか」という思いがある」とのコメントを出した。

出典 河北新報 18/02/26

いじめ訴えた15歳 転落死 埼玉・川口ノートに「教委ウソつき」

埼玉県川口市の県立学校1年生の男子生徒が8日に同市内のマンションから転落し、死亡していたことがわかった。生徒は中学時代にいじめを受け、これまで3回、自殺を図っており、「教育委員会はウソつき」などとする遺書とみられる走り書きが残されていた。市教委は3回目の自殺未遂後にいじめを認めて第三者委員会を設けたが、中断状態が続いていた。

9日に母親に代わって友人らが会見して、明らかに「亡くなったのは小松田さん(15)。会見の説明によると、8日午前1時20分ごろ、自宅近くのマンションから落ちて死亡した。現場の状況などから飛び降りた可能性が高いという。自宅にあったノートに「教育委員会はウソつき。いじめた人を守ってウソばかりつかせる。いじめられたほうがなぜこんなにも苦しまなきゃいけない」と記されていた。

市教委などは2016年4月の入学直後から仲間外れにされたり、持ち物にいたずらされたりするいじめを受け、学校側に訴えたが改善されず、同年9月と10月、17年4月に自殺を図り、3回目の自殺未遂の後、学校側はいじめがあったことを認めていた。

市教委は同年11月に第三者委を設置したが、それを伝えられなかったなどとして小松田さん側が不信感を持ち、今年2月から中断していた。市教委指導課の三浦伸之課長は小松田さんが亡くなったことについて「重く受け止め、事実関係を明らかにしていきたい」と述べた。

(堀恭太)

出典 朝日新聞 19/09/10

研究の意義と背景

- ここ数年のいじめの認知件数は横ばい(U字)

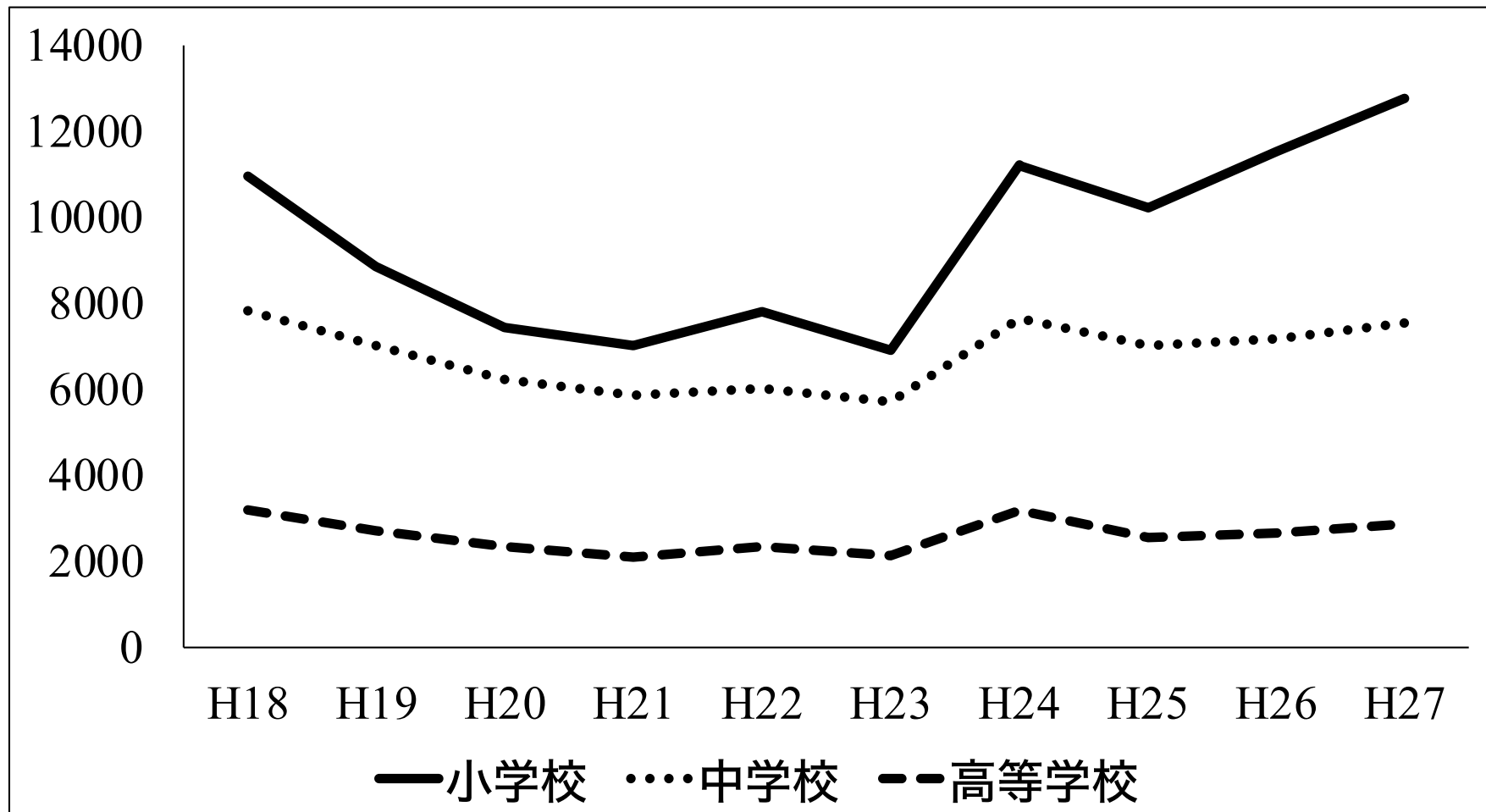


図1 いじめの認知件数(出典：文部科学省 2016)

研究の意義と背景

- いじめの**四層構造論**(森田・清永 1986)

- いじめる生徒
- 観衆(はやしたてたり, おもしろがったりして見ている)
 - いじめの積極的承認
- 傍観者(見てみない振りをする)
 - 暗黙的な支持
- いじめられる生徒

観衆や傍観者が果たす役割も大きい

→**クラス単位での特性(雰囲気や意識)が重要**

研究の意義と背景

- 集団特性

- 友達の数 (Hodges et al. 1997)
- 傍観者数 (森田 2010)
- 生徒の結束力 (大西 2007; 高木 1986)
- クラスの規範意識 (水田ら 2016; Salmivalli & Voeten 2004)
- 担任のいじめへの態度 (Saarento et al. 2013)

など

研究の意義と背景

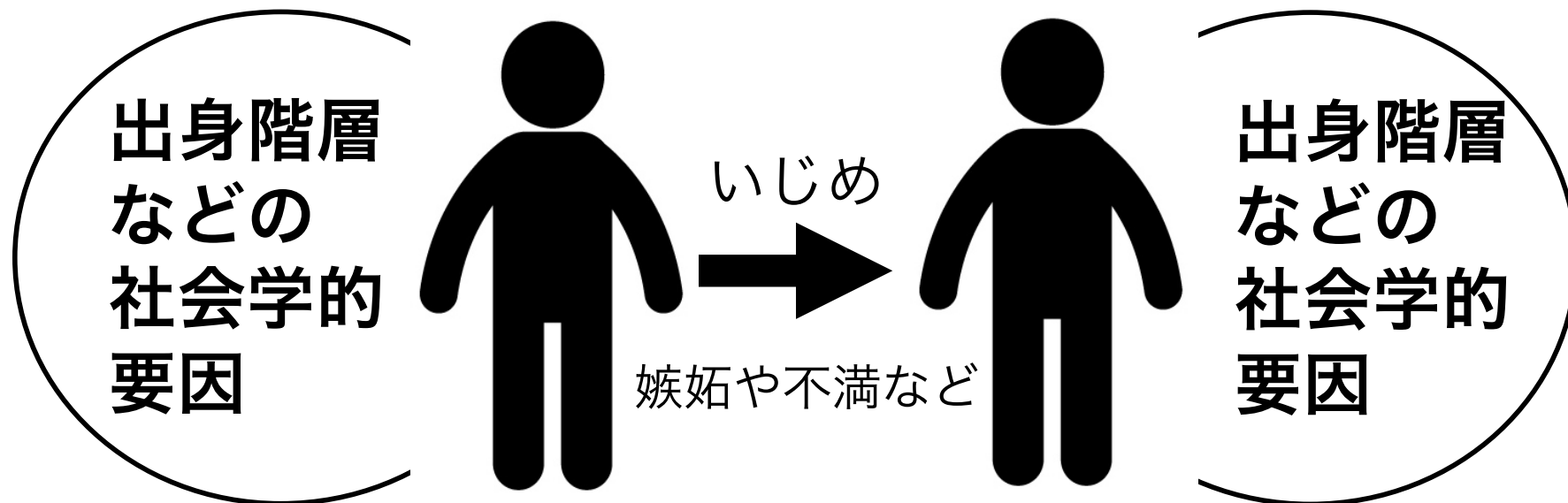
● 個人特性

- いじめの多くは加害者の嫉妬や不満などから生じる(土居・渡部 2008; 金網 2015; 正高 2007; 阪井 1989)
→ 個人の家庭背景などもいじめられる要因になりうることも十分考えられる
- 見た目の“悪さ”(外見)によるいじめ
(Olweus 1993=1995; 岩田 2008)
- 社会的排除の観点からみたいじめ
(岩田 2008; 三谷 2019)

分析枠組み

本研究のRQ

「誰がいじめ，誰がいじめられるのか」



なぜ出身階層によっていじめが規定されるのかを，被害・加害両者の出身階層から明らかに

先行研究

- Tippet & Wolke (2014)
 - 海外文献のメタ分析
 - 社会経済的地位といじめ加害, 被害ともに微弱ながら関連が認められる
(被害経験は低階層と正の相関)
- 中村 (2018: 40)
 - ESSMを用いた分析
 - 出身階層といじめ被害に関して, 影響は強くはないものの観察される
 - 恵まれない層でのいじめ経験率がやや高い

データと手法, 変数

データ

NHK中学生・高校生の生活と意識調査

- ・ **親子**調査（両親と中高生の子ども）
- ・ 子どもを層化無作為二段抽出（1800人）
（父母がいない場合も含む）
- ・ 調査方法：子ども 面接 両親 配布回収
- ・ 回収率：子 63.4% 父 53.8% 母 68.3%

データと手法, 変数

データ

NHK中学生・高校生の生活と意識調査

- ・ いじめの被害・**加害**の両経験をたずねる
→ほとんどの調査は被害経験のみ
- ・ 社会経済的地位を両親にたずねる
→子どものみの調査ではわからない**詳細な
出身階層**を検討可能

データと手法, 変数

手法

二項ロジスティック回帰分析
(Rare Events Logistic Regression)

従属変数 いじめの被害・加害経験

独立変数 親の職業 父親 専門管理
事務販売
マニュアル (ref)
母親 有職
無職 (ref)

データと手法, 変数

独立変数 親の学歴 父親 大卒以上
高卒以下 (ref)
母親 大卒以上
高卒以下 (ref)

統制変数 年齢・成績・友人数

ソフトウェア R (3.6.1)

結果（記述統計）

表1 性別といじめ経験に関するクロス集計表

	いじめた経験		合計		いじめられた経験		合計
	あり	なし			あり	なし	
男性	26 4.49%	553 95.51%	579 100.00%	男性	24 4.15%	555 95.85%	579 100.00%
女性	11 1.98%	545 98.02%	556 100.00%	女性	18 3.24%	537 96.76%	555 100.00%
合計	37 3.26%	1098 96.74%	1135 100.00%	合計	42 3.70%	1092 96.30%	1134 100.00%

注) 子どもの全サンプルを使用

データと手法, 変数

手法

二項ロジスティック回帰分析
(Rare Events Logistic Regression)

従属変数 いじめの被害・加害経験

独立変数 親の職業 父親 専門管理
事務販売
マニュアル (ref)
母親 有職
無職 (ref)

結果（被害）

表2 いじめ被害経験に関する規定要因

	男性		女性	
	B	S.E.	B	S.E.
切片	1.62	2.60	1.13	3.47
年齢	-0.14	0.16	-0.22	0.22
成績	0.01	0.29	-0.06	0.38
友人数	-0.19 *	0.09	-0.17	0.14
父大卒ダミー(ref 高卒)	-1.08	0.77	0.28	0.81
母大卒ダミー(ref 高卒)	1.03	0.68	-1.61	1.14
父専門管理事務販売ダミー (ref マニュアル)	-0.98	0.71	0.47	0.78
母有職ダミー (ref 無職)	-1.57 *	0.61	0.34	1.13
<i>N</i>	388		364	
* <i>p</i> < 0.05				

結果 (加害)

表3 いじめ加害経験に関する規定要因

	男性		女性	
	B	S.E.	B	S.E.
切片	1.57	2.74	0.01	3.44
年齢	-0.28 †	0.17	0.00	0.20
成績	0.03	0.27	-0.64	0.42
友人数	-0.12	0.09	-0.17	0.13
父大卒ダミー (ref 高卒)	-0.27	0.67	-0.79	0.98
母大卒ダミー (ref 高卒)	-0.68	0.66	0.94	0.85
父専門管理ダミー (ref マニュアル)	0.32	0.67	-0.08	1.27
父事務販売ダミー (ref マニュアル)	-0.06	0.88	-0.16	0.97
母有職ダミー (ref 無職)	0.73	1.06	-0.73	0.90
<i>N</i>	388		365	
† $p < 0.1$				

結果のまとめ

被害経験

- 男性では
友人数が少ないほどいじめられやすい
母が無職よりも有職の方がいじめられにくい
- 女性では有意な効果は確認できなかった

加害経験

- 男性では若いほどいじめを行いにくい
(10%なので判断には注意を要する)
- 女性では有意な効果は確認できなかった

考察

- 社会経済的地位は男性のいじめ被害にのみ影響があった
 - 「母が有職」の持つ意味
 - 両親が共働きで高階層
 - 父親の収入では家計が苦しい（≠ 高階層）
- いじめの加害経験に関しては社会学的要因からは説明できない
 - いじめる側はもっと複雑な理由でいじめか
- いじめ経験率の低さ

考察

表6 主な社会調査におけるいじめ被害経験率

調査名	調査年	寄託者	いじめ経験
社会とのかかわりと日頃の生活に関するアンケート	2007	玄田有史	34.80%
働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査	2007	東大社研	22.00%
Trends in International Mathematics and Science Study	2011	IEA	35.17%
中学生・高校生の生活と意識調査	2012	NHK	3.70%
教育・社会階層・社会移動全国調査	2013	中村高康	10.80%
Programme for International Student Assessment	2015	OECD	18.00%

考察

表7 いじめの規定要因（東大社研データ，男性）

	モデル1			モデル2		
	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)
切片	-1.89 **	0.62	0.15	0.15	0.89	1.16
年齢	0.01	0.01	1.01	0.01	0.01	1.01
父親大卒ダミー	0.39 *	0.17	1.48	0.39 *	0.18	1.47
母親大卒ダミー	-0.28	0.28	0.76	-0.18	0.29	0.83
親失業ダミー	0.75 ***	0.19	2.12	0.65 **	0.19	1.91
親離婚ダミー	0.51 †	0.27	1.66	0.33	0.28	1.39
一人っ子ダミー	0.20	0.28	1.22	0.13	0.29	1.14
末っ子ダミー	-0.22	0.16	0.80	-0.16	0.17	0.85
地域いじめ容認率	-0.04	0.05	0.96	-0.05	0.05	0.95
15歳時成績				-0.01	0.06	0.99
15歳時家庭の雰囲気				-0.40 ***	0.09	0.67
15歳時暮らし向き				0.06	0.10	1.06
15歳時朝食習慣				0.18 *	0.07	1.19
15歳時歯を磨く習慣				-0.29 ***	0.06	0.75
15歳時所有財				-0.03	0.03	0.97
-2LL		1173.69			1129.93	
Nagelkerke R2乗		0.03			0.09	

考察

表8 いじめの規定要因（東大社研データ，女性）

	モデル1			モデル2		
	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)
切片	-0.97 *	0.48	0.38	0.09	0.75	1.09
年齢	-0.01	0.01	0.99	-0.01	0.01	0.99
父親大卒ダミー	0.09	0.14	1.09	0.11	0.15	1.12
母親大卒ダミー	-0.25	0.24	0.78	-0.22	0.24	0.81
親失業ダミー	0.57 ***	0.15	1.77	0.53 **	0.16	1.70
親離婚ダミー	0.41 †	0.22	1.50	0.13	0.24	1.14
一人っ子ダミー	0.10	0.22	1.10	0.09	0.22	1.09
末っ子ダミー	-0.14	0.13	0.87	-0.18	0.13	0.83
地域いじめ容認率	0.02	0.04	1.02	0.02	0.04	1.02
15歳時成績				-0.14 *	0.06	0.87
15歳時家庭の雰囲気				-0.27 ***	0.07	0.76
15歳時暮らし向き				0.06	0.08	1.07
15歳時朝食習慣				-0.02	0.07	0.98
15歳時歯を磨く習慣				-0.03	0.09	0.97
15歳時所有財				0.02	0.02	1.02
-2LL		1767.40			1745.03	
Nagelkerke R2乗		0.02			0.04	

今後の課題

- データ内の変数の再検討
- オンライン調査の実施
いじめ被害・加害それぞれ一定程度サンプルを用意し，比較

付記

- ・ 本研究の二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所 附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「NHK中学生・高校生の生活と意識調査, 2012」(NHK放送文化研究所 世論調査部), ならびに「東大社研・パネル調査」(東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト)の個票データの提供を受けました。記して感謝申し上げます。
- ・ 本研究の一部は東北大学人工知能エレクトロニクス卓越大学院プログラムの支援を得て行われたものです。

付録

付表1 カテゴリー変数の記述統計量

	男性		女性	
	度数	%	度数	%
いじめ被害経験あり	14	3.61	8	2.20
いじめ被害経験なし	374	96.39	356	97.80
いじめ加害経験あり	14	3.61	7	1.92
いじめ加害経験なし	374	96.39	357	98.08
父学歴大卒以上	197	50.77	161	44.23
父学歴高卒以下	191	49.23	203	55.77
母学歴大卒以上	181	46.65	166	45.60
母学歴高卒以下	207	53.35	198	54.40
父 専門管理職	68	17.53	67	18.41
事務販売職	140	36.08	116	31.87
マニュアル職	180	46.39	181	49.73
母 有職	315	81.19	284	78.02
無職	73	18.81	80	21.98

研究の意義と背景

先行研究

分析枠組み

データと手法, 変数

結果

考察



付録

付表2 連続変数の記述統計量

		平均値	標準偏差	最小値	最大値	中央値
男性	年齢	15.20	1.73	12	18	15
	成績	3.00	1.08	1	5	3
	友人数	6.63	2.39	0	10	7
女性	年齢	15.24	1.76	12	18	15
	成績	3.21	0.99	1	5	3
	友人数	6.48	2.08	0	10	7

参考文献

- 土居健郎・渡部昇一, 2008, 『「いじめ」の構造』PHP研究所.
- Hodges, V. E., M. J. Malone, D. G. Perry, 1997, "Individual Risk and Social Risk as Interacting Determinants of Victimization in the Peer Group," *Developmental Psychology*, 33(6): 1032-9.
- 岩田正美, 2008, 『社会的排除——参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣.
- 金網知征, 2015, 「日英比較研究からみた日本のいじめの諸特徴」『エモーション・スタディーズ』1(1): 17-22.
- 正高信男, 2007, 『ヒトはなぜヒトをいじめるのか——いじめの起源と芽生え』講談社.
- 三谷はるよ, 2019, 「社会的孤立に対する子ども期の不利の影響——『不利の累積仮説』の検証」『福祉社会学研究』16; 179-99.
- 水田明子・岡田栄作・尾島俊之, 2016, 「日本の中学生のいじめの加害経験に関連する要因——クラスレベルと個人レベルでの検討」『日本公衆衛生看護学会誌』5(2): 136-43.
- 森田洋司・清永賢二, [1986] 1994, 『新訂版 いじめ——教室の病い』金子書房.
- 森田洋司, 2010, 『いじめとは何か——教室の問題, 社会の問題』中央公論新社.
- 中村高康, 2018, 「学校における『いじめ』体験と社会階層」中村高康・平沢和司・荒牧章平・中澤渉編『教育と社会階層——ESSM調査からみた学歴・学校・格差』東京大学出版会.

参考文献

- Olweus, D., 1993, *Bullying at school: What we know and what we can do*, Oxford: Blackwell. (=1995, 松井賚夫・角山剛・都築幸恵訳『いじめ——こうすれば防げる』川島書店.)
- 大西彩子, 2007, 「中学生のいじめに対する学級規範が加害傾向に及ぼす効果」『カウンセリング研究』40(3): 1–9.
- 高木修, 1986, 「いじめを規定する学級集団の特徴」『関西大学社会学部紀要』18(1): 1–29.
- Saarento, S., Karna, A., Hodges, E. V. E. & Salmivalli, C., 2013, "Student-, classroom-, and school level risk factors for victimization," *Journal of School Psychology*, 51: 421–34.
- 阪井敏郎, 1989, 『いじめと恨み心』家族教育社.
- Salmivalli, C., M. Voeten, 2004, "Connections between attitudes, group norms, and behaviour in bullying situations," *International Journal of Behavioral Development*, 28(3):246-58.
- Tippett, N., & Wolke, D., 2014, "Socioeconomic status and bullying: A meta-analysis," *American Journal of Public Health*, 104(6): 48–59.